

富山県中央植物園と 中国科学院昆明植物研究所との交流

富山県中央植物園 神戸敏成

富山県中央植物園

私が富山県中央植物園に着任したのは平成6年9月1日です。当時の富山県中央植物園は屋外展示園のみを部分開園するという未完成の状態で、ようやく展示温室の建設が始まりかけていた頃でした。その後、平成8年4月26日に富山県で開催された全国都市緑化祭に合わせて全面開園し、4つの展示温室(熱帯雨林植物室、ラン温室、熱帯果樹室、高山植物室)も公開されました(写真1、2)。



写真1 上空から見た富山県中央植物園

富山県中央植物園は植物展示のほか、教育・普及、調査・研究を行う日本海側初の総合植物園として整備され、調査・研究に携わるスタッフが10名いる我が国では稀有な存在の植物園としてスタートしました。私は現在企画情報課に属し、イベントや広報、友の会関係の仕事をする傍ら、組織培養の技術を用いた絶滅危惧植物の増殖・保存や育種に関する研究を行っています。

中国雲南省との交流

私にとって幸運であったのは、すでに多数の植物が導入されるなど、富山県中央植物園と中国雲南省との交流が始まっていたことです。この交流には県内の財界人の尽力があったと聞いています。花葉会の方であればご存知の通り、中国雲南省は「野生植物の宝庫」とも称され、植物の研究者にとっては憧れの地であり、もちろん私にとっても一度は行ってみたい場所でした。

この植物導入事業は平成12年まで続き、600種(品種を含む)を超える貴重な植物が富山県中央植物園に導入され、植栽して一般公開すると共に研究材料として活用されています。全面開園直後の平成8年5月には、当植物園と雲南省にある中国科学院昆明植物研究所との間で友好協定が調印され、未永く交流を進めることが確認され、今日に至っています。

屋外展示園の雲南コーナーには雲南省で最も有名な景勝地である「石林」(現在は



写真2 富山県中央植物園の展示温室群

世界遺産)から運んだ石組みも完成し(写真3 P.13)、チヨウキンレンやハンカチノキなどが入園者を楽しませています(写真4)。平成12年2月には雲南省から導入したトウツバキと熱帯植物を展示するための雲南温室が完成しました(写真5)。このように雲南省から導入した植物は富山県中央植物園の目玉になっています。



写真4 チヨウキンレン (地涌金蓮)



写真5 雲南温室で咲くトウツバキ

昆明植物研究所との共同研究

さらに、平成12年10月には雲南省の省都昆明市において、富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との間で共同研究に関する合意書が調印され、平成13年から10年間に渡る共同研究を行うことになりました。この時には、私も当時の黒川道園長に同行し、調印式に出席しました(写真6)。当時は今ほどインターネットが発達していなかったので、電話とFAXで日本とやり取りをしながら、二日間かけて合意書の文面を作り上げたことが私の記憶の中に今でも鮮明に残っています。

合意書の内容は「雲南省の貴重植物(特に稀産・絶



写真6 共同研究の調印式

滅危惧植物)について保全生物学的な調査・研究をする」ということで、5期10年の間に、ベゴニア属、マメ科、モクレン科、ツバキ科、サクラソウ科を主に研究をするというものでした。この合意書の内容は後に、基礎研究に加え応用開発研究を行うことも追加され、モクレン科とサクラソウ科が外された代わりにアヤメ属が加えられました。5期9年目を迎えた今年度は、トウツバキを中心にこれまで共同研究を行ってきた植物について調査・研究を継続することになっています。

この共同研究に関する合意をきっかけに両機関はさらに関係を深めることになりました。平成13年度からスタートした共同研究のトップバッターとして私が指名され、ベゴニア属を主たる研究テーマとして雲南省に3ヶ月間滞在することになったのです。私にとって中国を訪れるのは5回目(雲南省は3回目)でしたが、3ヶ月間の長期滞在は初めての経験であり、期待と不安が入り混じっていました。中国語は「你好」、「謝々」くらいしか喋ることができない私は、初めのうちは文化の違いに戸惑っていたのですが、植物導入時に富山県に滞在し、すでに日本語をマスターしていたたくさんの友人に助けられました。

3ヶ月間の滞在中、私が行なったのは4回の野外調査と組織培養によるベゴニアの増殖方法の確立でした。ベゴニアの調査では熱帯、亜熱帯地域である雲南省の南部から南東部にかけて、西双版納(シーサンパンナ)やベトナム国境の街である河口(ホーコウ)へも行きました。野外調査では毎日新しい植物との出会いがあり、感激でした(写真7、8)。

また、この滞在期間中に、忘れることができない植物



写真7 熱帯植物の特徴のひとつの板根



写真8 ベゴニア自生地を調査する筆者

との出会いがありました。それは、雲南省北西部の高山地域へ調査に出かけたときのことで。雲南省の北西部には以前からどうしても見てみたかった植物が私にはありました。「ヒマラヤの青いケシ」と呼ばれるメコノプシス属の植物です。メコノプシス属の調査が目的ではなかったのですが、もしかしたらという期待が内心ありました。ところが、調査期間中メコノプシス属の植物に出会うことは無く、最終日も夕方になり心残りではありましたが、ホテルへ戻ることになりました。諦めかけていた帰りの車中、ふと見た道路の法面に咲く青い花が私の目に飛び込んできました。まさに青い花のメコノプシス属植物でした。標高3300m、息が切れるのも忘れて法面を駆け上がり撮影をしました(写真9)。その後、雲南省ではほんとうにたくさんの美しい植物や珍しい植物に出会いましたが、このときの感激は今でも忘れることができません。



写真9 青い花が咲くメコノプシス属植物

第二の故郷 雲南

このように富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との友好は15年以上の長期にわたり続いています(表1)。県立の植物園が海外の研究機関と行なっている交流としては例が無いのではないかと考えています。このように長い年月をかけて築いてきた信頼関係は今後も長く続いていくと確信しています。

個人的にも雲南省とは深い繋がりができ、雲南省に多くの友人もできました。平成14年以降も毎年1週間程度ですが、私の出身である千葉大学育種学研究室(現植物細胞工学研究室)の三位正洋教授や学生時代の仲間と一緒に雲南省へ植物の調査に出かけています(写真10)。今では中国雲南省は私にとって「第二の故郷」のような存在になっています。これからも地道に交流を続け、日本と中国の友好の一助になればと思っています。



写真10 麗江の玉龍雪山の4680m地点にて

1993	<ul style="list-style-type: none"> ◆「富山県中央植物園が第一次導入計画により雲南の植物(144種類)を移植する件」に関する協力合意 ◆雲南植物の導入開始 ◆昆明植物研究所の職員派遣による交流開始
1994	<ul style="list-style-type: none"> ◆「富山県中央植物園が第二次導入計画により雲南の植物(518種類)を移植する件」に関する協力合意および「富山県中央植物園に石林の石を用いた庭園を建設する件」に関する基本合意
1995	<ul style="list-style-type: none"> ◆石林の石を用いた庭園完成
1996	<ul style="list-style-type: none"> ◆「中国科学院昆明植物研究所との友好協定」に調印
1999	<ul style="list-style-type: none"> ◆友好提携3周年を記念し、中沖県知事(当時)が昆明植物研究所を訪問し、記念植樹を行なった
2000	<ul style="list-style-type: none"> ◆展示雲南温室完成 ◆雲南植物の導入完了
2000	<ul style="list-style-type: none"> ◆中国科学院昆明植物研究所と共同研究に関する合意書に調印
2001	<ul style="list-style-type: none"> ◆中国科学院昆明植物研究所との共同研究開始

表1 富山県中央植物園と中国科学院昆明植物研究所との交流年譜



写真3 雲南コーナーに設置された石林の石